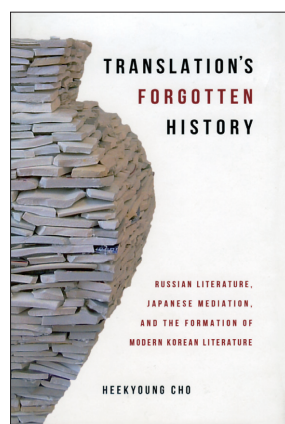


ヒギョン・チョー

# 『忘れられた翻訳史——ロシア文学、日本語の媒介、そして近代韓国文学の形成』

Heekyoung Cho, *Translator's Forgotten History: Russian Literature, Japanese Mediation, and the Formation of Modern Korean Literature.*

佐藤「ロスベアグ・ナナ



Harvard University Asia Center,  
2016

書籍のタイトルである「忘れられた翻訳史」とは、韓国における近代文学形成時期に翻訳が果たした役割の忘却を意味する。翻訳史は近年西欧を中心に展開しているトランスレーション・スタディーズにおいても注目されており、日本の翻訳史や通訳史に関する研究も数は少ないが刊行され、各々の地域においてさらなる研究が期待されるテーマである。

本書はとりわけ韓国における翻訳史を取り上げ、近代韓国文学が形成される過程で、ロシア文学が果たした役割や影響について分析し、それが日本語訳や日本文化を媒介して行われたことを明らかにする。日本の植民地であった当時の韓国社会や政治状況を射程に入れ、また翻訳者の持つイデオロギーや翻訳操作という視点を投じつつ、翻訳がいかに近代文学形成に密接にかかわったの

かを、事例研究を用いながら論じる意欲的な作品である。

以下に各章とその内容を紹介する。

はじめに——翻訳と近代文学の形成

1 名声と不安の操作——モデル知識人と文学理論の構築

2 文学と現実の書き直し——翻訳、ジャーナリズム、そして近代文学

3 新しい文学への渴望——十九世紀ロシア文学からのプロ

レタリア文学構築

おわりに——東アジアにおける共有された感覚と代替的な文学史の想像

「はじめに」では、東アジアにおいて近代文学を構築する力となつたのは翻訳であり、東アジアの近代においては、翻訳は創造であつたとする。チヨーは、翻訳が創造性を欠く副次的な産物であり、歴史を問い直す材料にはならないという考えは、歴史的に構築された国民文学の近代的な概念の幻想であり、近代韓国文学史の研究は、翻訳が果たした役割を抜きには語れないと強調する。チヨーによれば、翻訳というプロセスを経てのみ可能になる文化同士の交渉は、韓国における国語と国文学の誕生に不可欠であつたにもかかわらず、国語がそのような「雑種」的な混淆の産物であるという事実を隠蔽<sup>いんぺい</sup>するために、翻訳は、独創性のない、二次的な行為として扱われる必要があつたと言う。チヨーは、韓国における近代文学史を論じる際には、特に日本語を介しての翻訳について研究する必要性があることを再度強調する。

第一章では、韓国の近代文学形成が、日本の統治下で発生し、広義には、この影響下で創造されたことを論じる。韓国への海外文学の紹介は、韓国の近代化の過程の中で行われたこと、文学作品の多くが日本語からの重訳であつたこと、ロシア文学の多くが日本語を介して行われたにもかかわらず、この事実が隠蔽／忘却されてきたことを社会政治的な状況と照らし合わせて考察する。第二章では、韓国における近代文学形成に特に大きな影響を及ぼしたロシアの作家、アントン・チェーホフの韓国語訳を行った

玄鎮健<sup>ヒョジンゴン</sup>を中心に考察している。チヨーは、玄の翻訳もまた日本語翻訳からの重訳であり、登場するキャラクターが、ロシア語から、日本語へ、そこから韓国語へと旅をする過程で、チェーホフの設定したそれとは異なるものに変わり、「死後の生」を得たとする。

さらに、日本語翻訳からの重訳として韓国に受容されたロシア文学が、国民としてのアイデンティティやプロレタリアート文学の形成などに貢献し、他の西洋文学とは異なる役割を演じたことを指摘する。

第三章では、ロシアの作家であるレフ・トルストイの文学が翻訳を介し、韓国文学に与えた影響について考察している。チヨーは、その中で、真のキリスト教として奉仕するためのトルストイの感情論が、翻訳家の李光洙<sup>イグァンソ</sup>によって、韓国国民文学の形成に貢献する内容へと巧みに変換され、翻訳を介して大衆と社会のイデオにすり替わつたことなどを指摘する。韓国のプロレタリアート文学者が、ロシア文学の感情的な部分だけではなく、その論理性にも共感したことを、さまざまな資料から実証する。チヨーは、一九二〇年代、日本植民地時代の韓国人作家にとって、それらが、現在の韓国で国際的な現実感覚の核となつていたとする。

「終わりに」では、上述してきたことを踏まえて、韓国の近代文学形成において、日本語を介しての重訳の役割を真摯に論じることの重要性を説き、文学翻訳史を論じる際には、翻訳史とそこに

働く社会、そして政治的な力学の考察も必要であることを指摘する。

くり返しになるが、本書は、翻訳という、これまで忘却されてきた行為が、韓国における国語や近代文学の形成に必要不可欠であったことを証明しようとする意欲的な作品である。ポストコロニアル研究、カルチュラルスタディーズの観点から、学際的な学問としてイギリスを中心に認知されつつある、トランスレーション・スタディーズ (translation studies) にも言及しつつ論じている。

東アジアの中でも、とりわけ韓国に関する事例研究を含む近現代翻訳史の英語による研究は、希少である。近代、そして現代韓国において日本語を介したロシア語翻訳がもたらした影響について詳細な事例研究をもとに論じた本書は、日本の翻訳史ともかわり、今後いつその議論がまたれる分野である。

最後に、本書を読み、いくつか気になった点をあげておく。

チョーは、本書について、広く東アジアの近代文学形成に関する研究であるとするが、韓国の近代文学形成時に翻訳がどのような役割を演じたのかを語るには十分な事例研究をあげているものの、これを東アジアにまで押し広げるのは少し無理がある。チョーの言う東アジアの概念は明確ではないが、本書を読む限りでは中国、日本、韓国を指しているようである。しかし、日本、とくに中国に関する事例は断片的で、東アジアの枠で語れるほどの論拠には

なっていない。

また、本書は翻訳に真正面から取り組んだ研究であることから、トランスレーション・スタディーズにも言及したと思われるが、同学問分野において翻訳史の重要性を説いているアンソニー・ピムや東アジアにおける翻訳史の問題に取り組んできている若林ジュディ、ローレンス・王チーウオン、また「非西洋圏」の翻訳行為や研究が軽視されていることに警戒を鳴らしてきた故マーサ・チャン、マリア・ティモツコ、またはオヘイガン統子などへの言及がないのが気になる。本書はむしろ地域研究の枠組みでなされてきた翻訳研究として書かれており、無論その貢献に疑いはないが、便宜的にトランスレーション・スタディーズに言及した感は否めない。主に西洋を中心に展開してきたトランスレーション・スタディーズを、今後アジア、アフリカ、アラブの文脈でどのように展開していけるのか、はまさにそこに関わる研究者たちが意見を戦わせているところであり、そういう意味で「非西欧圏」におけるトランスレーション・スタディーズはまさしく「構築過程」であると言える。そのような現在の状況に鑑みると、本書の立ち位置は明確ではない。

ただし、『忘れられた翻訳史』が挑戦し、明らかにしたこと、は貴重であり、論じきれなかった部分も含め、今後の展開が待たれる。